2022年9月25日（日）主日朝礼拝説教

『あなたの家を建てる』　井上隆晶牧師
サムエル記下7章25～29節、マタイ福音書17章1～8節

❶【祈りをささげる勇気】

ダビデはイスラエルの国の統一をなしとげ、王となりました。サムエル記下7章1節に「**王は王宮に住むようになり、主は周囲の敵をすべて退けて彼に安らぎをお与えになった。**」とあります。ふと、振り返ると「神様の箱」を納める神殿がないことに気がつきます。そこで彼は預言者ナタンを呼んで相談します。「**私はレバノン杉の家に住んでいるが、神の箱は天幕を張った中に置いたままだ。**」（同2節）ナタンは「心にあることを実行なさるとよいと思います」と答えます。しかし、その夜、神はナタンに言葉を告げられました。「**私は…今日に至るまで家に住まず、天幕、すなわち幕屋を住みかとして歩んできた。…なぜ私のためにレバノン杉の家を建てないのか、と言ったことがあるだろうか。**」（同6～7節）そしてナタンはダビデに「**主があなたのために家を興す**」（11節）と告げます。それはダビデとその子孫の家を堅く建て、その王国を揺るぎないものとするという祝福の言葉でした。これを「ダビデ契約」と呼びます。旧約聖書の中にはいくつかの契約（ノア契約、アブラハム契約）があり、そのうちの一つです。
ダビデはこれを聞いた時、主の前に出て座り、感謝の祈りを捧げました。それが18節以下に書かれています。その中で特に27節の言葉が心にとまりました。「**万軍の主、イスラエルの神よ、あなたは僕の耳を開き、『あなたのために家を建てる』と言われました。それゆえ、僕はこの祈りをささげる勇気を得ました。**」（27節）この「家を建てる」というのは建物ではなくダビデ王朝を建てるという意味です。彼は「**あなたは僕の耳を開いてくださった**」と祈りました。耳が開くって何でしょう。それは神の言葉を自分に言われたこととして聞いたということです。聖書を読んでも、昔話だと思って読んだり、自分の事として聞いていないと耳が開いていないのです。すると喜びが湧かず、力にならなりません。ダビデは、神の言葉を自分に対するものとして聞いたのです。それがあまりにもすごい約束なので、祈りをささげる勇気を得たというのです。祈りというと自分の願い事をいうことだと思っている人がいますが、神は私たちに必要なものは既にご存知です。**だから私の思いを聞いてもらうのが祈りではなく、神のあなたへの思いを聞くことが祈りであり、そこから出てくる応答が本当の祈りなのです。「イスラエルよ、聞け。」**（申命記5：1）という言葉を思い出しましょう。神は聞いてほしいのです。

❷【神が人間にしてくれたことを喜ぶこと】

最初ダビデは、神のために家を建てようとしましたが、神の答えは、神がダビデのために家を建てる、というものでした。ここにキリスト教信仰の特徴が非常に

よく出ています。

（1）第一に、**神は人間の手が造ったようなものにはお住みにならないということです。**それはソロモンも「**神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。私が建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。**」（列王記上 8：27）と語り、パウロも「**この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住まいになりません。**」（使徒 17：24）と語っています。神は何か足りないことでもあるかのように、人間の手で仕えてもらう必要はないのです。建物は、神の為ではなく人間の為にあります。人間が集中して神と交わるために建物が必要なのです。また、人間が神に仕える意味は神を助けるためではなく、奉仕を通して人間が豊かにされるためです。

（2）第二に、**人間が神のために何かをすることよりも、神が人間にして下さったことを知り、それを喜ぶことを神は求めておられるということなのです。**この世の宗教は、人間が神のために一生懸命働き、立派な建物を建てようとします。

●皆さんは天理市に行って、天理教の本殿を見たことがあるでしょうか。その境内は縦 1 キロメートル、横 1 キロメートルあります。向こうの端は見えません。ものすごい大きな敷地に立派な本殿が建っています。また今、テレビで毎日放送されている旧統一協会は、韓国に莫大な土地を買い占め、巨大な神殿のような建物を作っています。そのお金はすべて信者から搾り取ったものです。統一協会では神の為に 5%のノルマを達成するように命じられます。「神様の為に」「まことの御父母様の為に」といって信者は身を削り、家庭を崩壊させ、神様を助けなければと必死に働くのです。

一方キリスト教は、神が人間のために働かれます。私たちが寝ている時も働いておられます。救いはすべて上からのものです。神の方から近づいて来られ、神が苦しみ、神が背負い、神が救い出すのです。自分が一生の間に何をなしたかを考え始めると私たちは悪魔の罠にはまり、嫌になります。そこには競争原理しかなく、喜びはありません。しかし神が自分にして下さったことを思い出す時、そこに喜びが湧いてきます。

❸【主が建てられる私たちの家とは、復活の体のことである】

では、神が私たちの為に建てて下さる家とは具体的に何でしょうか？イエス様は三人の弟子ペトロとヤコブとヨハネを連れて高い山に登られました。するとイエス様の姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽よりも輝き、服は光のように真っ白になりました。イエス様の変容です。モーセとエリヤが現れ、イエス様と語り合っていました。それがあまりにも素晴らしい光景だったので、ペトロが「**主よ、私たちがここにいるのはすばらしいことです。お望みでしたら、私がここに仮小屋を三つ建てましょう。**」（マタイ 17：4）と言うと、それには何の返事もなく、光り輝く雲が現れ、その雲の中から父なる神の声が聞こえてきました。彼らは恐

れてひれ伏してしまいました。その体験があまりにもすごかったのでペトロは後に、手紙の中にも書き残しています。「**私たちはキリストの威光を目撃したのです。荘厳な栄光の中から、『これは私の愛する子、私の心に適う者』というような声があって、…**」（Ⅱペトロ１：16～18）ペトロはこの手紙の中で、自分の体は「**仮の宿**」（tent of this body）だと二回も言っています。（同１：13、14）自分は間もなくこの世を去るので、自分が去った後も、キリスト教徒は「**神の本性**」（同１：14）にあずかるという尊くすばらしい約束を思い出して、奮起してもらいたいと書いています。

ペトロは最初、「**仮小屋を建てましょう。**」といいました。神が現れた場所を聖地といい、それを記念する為に人間は建物を作ります。でも**主はそんな思い出話に浸るようなことは喜ばれません。山を下りて、仮小屋ではなく、本物の神殿、つまり朽ちない体を作るために十字架に登られます。キリストが見せてくれた栄光の体は、神が将来、人間に与えてくれる復活体、栄光の朽ちない体です。**仮小屋はやがて壊れます。地上の神殿も崩れ去ります。弟子たちが神殿の石を見て驚き「**何とすばらしい石、何とすばらしい建物でしょう**」（マルコ 13：1）と言った時、主は「**一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない**」といわれました。**人間が神に作ったものはすべて崩れ去り、消え去ります。しかし、神が人間に作られた神殿は永遠に残ります。それは死なない体です。主は外なる神殿（復活体）を用意してくれましたが、私たちは内なる神殿を用意しなければなりません。それはキリストと聖霊が住まう魂です。**

アトスの修道士はこう言っています。「神殿を建てようとするなら、基礎を掘り下げなければなりません。…あなたの多くの時間と、唇と呼吸を神にささげなさい。あなたのなかに神がご自分の憩いの場をおつくりになるのは、これらのささげ物をもってなさるからです。」

●渡辺和子シスターがタクシーに乗った時、運転手さんから「お客さんは、ご主人も、お子さんもないんですか。味気ないでしょうな」と言われたことがあります。それに対して「いいえ、そうでもないですよ」と微笑んだといいます。シスターは書いています。「一旦、ひとつの道を選んだ以上、そこには If only（もし…だったら）の生き方はもはや許されない。…結婚生活においてもそうなのではないだろうか。「もう少し生活にゆとりさえあれば、他人のことにも奉仕できるのに」とか「夫さえしっかりしていてくれれば、私も幸せになれるのに」などと、非現実の世界に逃避しがちである。…とんでもない話である。私の聖人となる道は、今の仕事にある。職場にある。職員、同僚と暮らす中にある。ひとりひとりの幸せは、与えられた場所で作って行かなければならないのだ。」

神様が下さった人生、時間、家族、仕事の中で、私たちは自分という畑を耕し、キリストが住まう神殿を建てなければならないと思います。主は、「永遠に残るもののために働きなさい」と言われました。私たちのこの世の肉体は「仮の宿」「仮小屋」です。神の国には「本当の宿」が用意されています。そこに住まうのが楽しみです。それにふさわしい魂を用意したいと思います。